

# コントロール動詞 *promise* の繰り上げ動詞用法への通時的変化について

笠井 俊宏

## 1. 序

伝統的な生成文法の枠組みにおいて、動詞 *promise* は(1)に示すように PRO を含む CP 節を補部を取る主語コントロール動詞として一般的に分析されている。

- (1) John<sub>i</sub> promises (Mary) [<sub>CP</sub> PRO<sub>i</sub> to leave].

しかし、Traugott (1997)では、(2)に示すような虚辞の *it* を主語に取る繰り上げ動詞的用法の *promise* も存在することを観察している。

- (2) It promises to be a hot and grueling day. (1992 *Independent* [HECTOR])  
(Traugott (1997: 189))

Traugott (1997)では、この通時的変化を主に *promise* の補部に着目し、*promise* が取る直接目的語が *indefinite object* を多く取るという観察より、本来の遂行的意味から「見込む、見込まれる」という意味へ変化したと考えている。しかし、The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME)と The Penn Parsed Corpus of Modern British English (PPCMBE)を用いて調査した所、表 1 で示すような数値で *definite object* も同様に補部にとることが分かる。そのため、本稿では Kume (2011)の知覚動詞 *see* の文法化において、主語にも焦点を当てた分析も考慮に入れる必要があると主張し、*promise* の通時的変化に伴う統語構造の変化について論じる。

Table 1: Tokens of *Promise* with a Direct Object

	1500-1570	1570-1640	1640-1710	1710-1780	1780-1850	1850-1920
<i>promise</i> DO (definite)	2	1	4	2	8	4
<i>promise</i> DO (indefinite)	5	9	10	6	11	10

## 2. Kume (2011)

Kume (2011)では、知覚動詞 *see* が *light verb* へと文法化したことについて無生物主語の観察から議論している。現代英語の *see* には *time*, *location*, *other types* を無生物主語にとることができ、*time*, *location* が主語の場合は(3)で示すように現在分詞が現れることができるため、*Asp* を補部にとる構造であると考え、*other types* の主語では現在分詞が付くと容認性が落ちることから裸 VP を取る構造であると考えている。

- (3) a. New York saw its first New Year's ball drop in 1907.  
b. Of late every London recital has seen her trying out a new one.

(Onoe and Suzuki (2002: 31-32), cited in Kume (2011: 210))

Kume(2011)では、上記のように構造変化していったプロセスを3段階に分けている。まず、*see* は初期近代英語期に無生物主語を取る例全てが *location* を示す例であったと観察しており、これらの事例には擬人化であると考え、*see* は語彙的な動詞として知覚の識別を示す意味であったと主張している。次に、後期近代英語期に入り *time* の主語が加わったことで主語により広いものを取れる一般化により意味のシフトが起こり、語彙的な意味から存在の意味を持つようになったと主張している。そして、更なる一般化が起こり *other types* の無生物主語が生起できるようになったことで、解釈の為に別の述語と *amalgamate* する場合に限り意味の漂白が起こり、裸 VP を取る構造へと変化し使役の意味を持つようになることを観察している。

## 3. コーパスデータ

まず、中英語期においては有生主語を取るのに加え(4)に示す *the world* を主語にとる例を観察できる。Kume (2011)に従うと擬人化の例として捉えることができ、遂行的な意味もこの時点では持つことが考えられる。

- (4) *þe good spirit shoulde not truste..to thingis þat þe worlde promisith.*  
*the good spirit should not trust to things that the world promises*

(c1450(c1440) Scrope Othea (StJ-C H.5)108/25: MED)

表 2 では PPCEME と PPCMBE を使用し、無生物主語を取る *promise* とその補部構造の調査結果を示す。

Table 2: Tokens of *Promise* with Inanimate Subjects

	1500-1570	1570-1640	1640-1710	1710-1780	1780-1850	1850-1920
<i>promise</i> DO	0	0	2	2	1	2
<i>promise</i> IO	1	0	0	0	0	0

<i>promise IO DO</i>	1	0	0	0	0	0
<i>promise to be</i>	0	0	0	0	1	0
<i>promise to infinitive</i>	0	0	0	2	1	2

また、Early English Books Online Corpus (EEBO)より(5)のような例が観察される。

(5) and his house promised to bee therein, ... (EEBO, 1610)

(5)で示すように、初期近代英語期になると擬人化の例として捉えづらくなり、一般化により認識的意味も観察されるようになったと考える。その後、更なる一般化が進み、意味の漂白が起こること(2)で示されるような虚辞の主語にまで拡張していったと考えられる。

#### 4. 統語構造の変化

この節では Kume (2011)の分析を基に、一般化、意味の漂白が起こったことによる、意味シフトと構造変化を考察する。The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second Edition (PPCME2)からの例(6a)を皮切りに、それぞれ(7)の統語構造へと変化すると提案する。

- (6) a. ... ye promysed me to mete me here by noone.  
       ... you promised me to meet me here by noon (CMMALORY,65.2208: 1420-1500)  
 b. and his house promised to bee therein, ... (EEBO, 1610)  
 c. It promises to be a hot and grueling day. (1992 Guardian [HECTOR])  
       (cf. Traugott (1997: 185))

- (7) a. ...[<sub>VP</sub> promysed me [<sub>CP</sub> [<sub>TP</sub> PRO to mete...]]]  
 b. and his house [<sub>VP</sub> promised [<sub>CP</sub>/<sub>TP</sub> to bee therein, ...]  
 c. [<sub>TP</sub> It<sub>i</sub> T [<sub>VP</sub> v [<sub>VP</sub> promises [<sub>TP</sub> t<sub>i</sub> to be hot and ...]]]]

まず(6a)の中英語期では、主語は有生の ye(you)であり、一般的なコントロール構文の分析に従い PRO を主語に伴う CP 構造を取ると考える。次に(6b)の初期近代英語期では、擬人化で考えることが難しくなるため、一般化が起きたと考える。そのため、本来の遂行的意味から少し意味が変わり、「見込む、見込まれる」という意味が加わることで意味が希薄化すると考える。(6c)の現在の英語では、更なる一般化が起こり Kume (2011)の other types に相当する虚辞の it も取れるようになったことで意味の漂白が起き、認識的な「~だろう」という意味で用いる場合は、その解釈のため構造が CP であったものから、繰り上げ構文が許される TP へ構造が変わると考える。また、(8)で示すように後期近代英語期の 1897 年において虚辞の there を含む例が OED online より観察できるため、(7c)へと構造変化することを裏付ける証拠であると考えられる。

- (8) If the battle is ever fairly engaged between the would haves and the have-gots, there promises to be a reign of terror. (1897 P. Collier Amer. & Americans x. 142/OED online)

#### 主要参考文献

Kume, Yusuke (2011) "On the Complement Structures and Grammaticalization of *See* as a Light Verb," *English Linguistics* 28. 206-221.

Traugott, Elizabeth C. (1997) "Subjectification and the Development of Epistemic Meaning: the Case of *Promise* and *Threaten*," *Modality in Germanic Languages: Historical and Comparative Perspectives* ed. by Toril Swan and Olaf Jansen Westvik, 185-210, Mouton de Gruyter, Berlin.

#### コーパス

Davies, Mark. (2017) *Early English Books Online Corpus*. Available online at <https://www.english-corpora.org/eebo/>.

Kroch, Anthony, Beatrice Santorini, and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME), University of Pennsylvania, Philadelphia.

Kroch, Anthony, Beatrice Santorini, and Ariel Diertani (2010) *The Penn Parsed Corpus of Modern British English* (PPCMBE), University of Pennsylvania, Philadelphia.

Kroch, Anthony and Ann Taylor (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second Edition* (PPCME2), University of Pennsylvania, Philadelphia.

#### 辞書

*The Oxford English Dictionary Online* (OED Online), Oxford University Press, Oxford.

*Middle English Dictionary* (MED), University of Michigan Press, Ann Arbor.